

力が技を凌駕するか、技が力を制するか

二〇〇六・二〇〇七年のウィンターシーズンが終わった。スキージャンプは若手の台頭で、表彰台の顔ぶれが様変わりした。明らかに、世界のジャンプ界は世代交代の時期を迎えている。他方、若手が育たない日本は葛西や岡部といった大ベテランは頑張っているが、すでに往年の力はない。彼らの歳の半分にも満たない若い選手が表彰台を独占している。今や、日本ジャンプ陣の過去の栄光は見る影もない。

スキージャンプは本戦前日に予選があり、上位五〇名が本戦に出場できる。もともと、ランキング上位一五名はシードされるから、予選から本戦に入れる選手は三五名である。五〇名の選手で戦われる本戦一回目の成績で二〇名が振り落とされ、残り三〇名で本戦の第二ラウンドが行われる。最終順位は一回目の成績と二回目の成績の合計で決まる。

ほんの数年前まで、W杯のスキージャンプの上位には、原田、葛西、船木、宮平、岡部、斎藤などの選手が常に顔を出していた。本戦一回目を終えて、ベストテンに二・三名の日本選手が入り、表彰台を狙うのがふつうだった。ところが、今年はシードされる選手がわずか予選で落ちる選手が続出して本戦で日本人選手が見られないという前代未聞の事態が何度も起きている。かろうじて本戦に出場しても、二回目に進めないのもふつうになった。船木にいたっては、格下のインターコンチネンタル杯でも、本戦に進めないという惨めな状態が続いている。いったい日本のジャンプ陣に何が起きたのだろうか。

台頭する若い力

今年のジャンプ界のスターは、オーストリアのシュリーレンツァウアー（二七歳）である。一六歳一ヶ月でW杯初勝利を上げ、その後もコンスタントな成績を残して、ランキング二位で今シーズンを終える。一位はノルウェイのヤコブソン（二一歳）で、彼も今シーズンが事実上のデビュー・シーズンである。

オーストリアのジャンプ陣は全盛期を迎えており、二〇歳のモルゲンシュタイン、二一歳のコフラーの若手に、コッホとロイツルの二五歳コンビ、

スキージャンプは何シーズンにもわたってトップに君臨することができない非常に難しい競技だ。前年のチャンピオンが翌年には並の選手に落ち込むことも珍しくない。昨年のW杯覇者であるチェコのコップ・ヤンダも、今シーズンは下位に低迷している。それほど浮き沈みが激しい。

難しいジャンプ技術

明らかに、技術的な水準を維持することが難しい競技だと言える。滑走姿勢、飛び出し角度、滑空姿勢などの技術的な問題の中で、一番のポイントは飛び出しのタイミングである。ラージヒルでジャンプ台を飛び出す速度は時速九〇km前後。一秒間に二五mの速度だ。この滑走速度から踏切の一点のポイントを掴まなければならない。踏切が早すぎても遅すぎても、滑走速度を十分にスキー板に乗せることができない。このポイントは百分の一秒、二五cm程度の範囲にあるだろう。このポイントを体でどう覚えるのか。いったんポイントを外すと、それを取り戻すことが難しいようだ。選手はこのリリースポイントと体を覚えるために、ジャンプの数をこなしながら、体に覚え込ませる。

さらに難しいのは、ジャンプ台によって傾斜角度が少しずつ異なるから、踏み切りのポイントが違う。だから、ジャンプ台を転戦するW杯では日替わりで勝者が変わることも珍しくない。年末から年始の四つのジャンプ台競技で競うFour Hills Tournament（ジャンプ週間）で、四連勝し

に、札幌の勝利で、五輪と世界選手権の金メダルは三個になった。こういう幸運な選手は他にいない。ノルディック複合W杯四シーズン王者で、通算四五勝のマンニネンが、五輪と世界選手権にことごとく嫌われ、漸く札幌で初めての金メダルを手にしたのに比べると、何とも運の良い選手だ。さらに、W杯で実績ゼロのフィンランドの若手オロもいきなり銀メダルを獲得し、団体戦でも大ジャンプを繰り返した。彼にもこのジャンプ台が合っているのだろう。これがオロのサクセスストーリーの始まりになるかもしれない。さらに、大倉山ジャンプツェで過去に好成績を残しているベテランのヨケルソイも、調子が良かった。やはりジャンプ台との相性があるのだろう。多くの選手は微妙に舞う大倉山の風に悩まされたようだが、それでも距離を稼ぐ選手と失速する選手がいるから、この競技は面白い。

ジャンプ団体戦の金メダル争いは最初から選手層の厚いオーストリアとノルウェイに絞られていたが、オーストリアの圧勝に終わった。この勝負よりスリリングだったのは三位争いである。当初、日本がメダル争いに加われるとは誰も考えていなかった。W杯の実績からすれば、良くて六位が妥当なところだ。それは前日のラージヒルの結果からも予想されるどころだ。ところが、意外にも三位に入るという嬉しい誤算が起きた。

団体戦は四名の選手が二本ずつ飛び、その八本の合計点で争われる。ジャンプの飛距離は、K点（大倉山は二二〇m）を超えればボーナスポイントが加算されるが、K点を下回れば逆にポイントが減点される。だから、合計八本のうちK点を大幅に下回る失速飛行

ングはかなり落ちる。

アホーネンを筆頭に全盛時代を迎えていたフィンランドは、アホーネンの後退とともに突出した選手がいなくなった。シード枠には若手とベテラン勢三名が顔を出しているが、メダル争いに顔を出すのが稀になった。フィンランドも若手の伸び悩みを抱えている。

同じことはドイツにも言える。スター選手ハナヴァルトが若くして引退し、ベテランの域に達しつつあるシュミットの頑張りが目立つほどで、若手の台頭が見られない。救いは唯一、ウールマンが上位争いに顔を出していることだ。

今シーズン、意外な活躍をしているのがロシアである。これまで団体戦のチームを組むのがやっとだったロシアが、日本を押さえて上位三〇位に三名の選手を送り込むほどになった。団体戦で日本がロシアに勝つのが難しい状況になったが、選手層は厚いとは言えない。

日本と同じほどに落ち込みが激しいのは、スロベニアである。数年前には若手の台頭がみられたが、今シーズンは上位三〇位に位置している選手が一名と寂しい状態になっている。

個人で見ると、日本の葛西（三四歳）、フィンランドのアホーネン（二九歳）、ポーランドのマリシュ（二九歳）の三名は、浮き沈みの激しいジャンプ競技の中で、長いシーズンにわたって活躍している実力者だが、一人気を吐いているのはマリシュだけで、葛西もアホーネンももう表彰台を狙う力はない。

明らかに、世界のスキージャンプは世代交代の時

み合っていないという。ベテラン選手にパワーを主張しても難しい。若い選手にスキージャンプの理屈を納得させ、飛び出しの力と角度を徹底的に教え込む方が良いだろう。遠くに飛ぶためには、脚力が必須だ。

技だけでは、世界の舞台では勝てない。勝てないどころか、今や本戦に入っていくことすらできなくなった。日本のトップ選手と世界のトップ選手とは、ラージヒルの飛距離の差は一〇m以上ある。本戦一回目で落ちる選手のトップとの飛距離の差は二〇mもある。この差は技ではない。パワーである。このことを理解して若手を鍛えないと、日本のジャンプ陣の復活はないだろう。

ノルディック世界選手権

札幌で開催された世界選手権のスキージャンプは、今後のジャンプ界を占う材料を提示してくれた。

興味深いことに、W杯をリードするヤコブソンとシュリーレンツァウアーは、二人とも予選ジャンプで失速した。気乗りしないジャンプだった。大倉山のジャンプ台が彼らの感覚に合っていないのか、初めての海外遠征で時差調整ができなかったのか。いずれにしても予選での失速は、翌日のラージヒル本戦、翌々日の団体戦まで影響し、W杯の力を発揮できなかった。もしかして、この札幌の結果が彼らの恐れを知らない勢いを止めた大会になるのかもしれない。

これにたいして、スイスのラッキーボーイ、アマンはよほど大倉山が合っているのか、すべての競技で距離を伸ばした。W杯で二勝しかしていないの

堅選手を鍛えても無駄だろう。ここは思い切って若手に切り替えるしか、方法がない。若手中心に方針を切り替え、伊東大貴をリーダーにして栃本翔平、伊藤謙四郎他の十代選手にもっとチャンスを与えるべきだろう。

後書き

書き出して、今年のW杯優勝者はヤコブソンと書いたが、実はこの原稿執筆時で未だW杯のすべての競技が終わっていない。札幌で失速したシュリーレンツァウアーとヤコブソンの調子は下降状態にあり、他方で宮ノ森で金メダルを獲得したマリッシュがこの上位二者を激しく追い上げている。総合優勝は余談を許さない。こうなると若い二人より、ベテランのマリッシュが有利だが、どうなるだろうか。W杯終戦に向けて、これら上位三者の戦いが興味深い。まさに若い力が勝つか、それともベテランの技と経験が勝つか。

岡部も葛西も、若い選手に混じって頑張っている。一五歳も若い選手を相手に頑張っているのだから見上げたものだ。技と力の闘いが続いている。

